

「先生、何のために問い合わせを追究するのですか」ある児童の発言に、ハツとさせられた。もちろん教師には、「問い合わせを創出し、追究すること」に明確な学習目的がある。しかし、いざ子どもの立場からすると、「やらされている学習」として受け止められてしまうことがある。

特に文学教材では、「まず問い合わせをつくること」「既定路線のように感じている子もいる。だからこそ、「何のために」「この教材で」問い合わせをつくるのか、その意義を教師も子どもも明確に説明できる必要がある。私は、問い合わせを追究する意味や価値を子ども自身が自覚す

しかし、いざ子どもの立場からすると、「やらされている学習」として受け止められてしまうことが

追究することの意味とは
伴野

さざなみ国語教室

第524号 2025年11月25日
発行者代表 吉永幸司
連絡先 大津市柳川2-11-5
TEL 077-522-1008
発行所 滋賀児童文化協会
NPO 現代の教育問題研究所

る学びの先に、真に言葉の学びを自覚する姿があると考える。

先日、六年生の教材『やまなし』の実践を行った。解釈の難しい文章教材だからこそ、自分なりの解釈をつくる上で、「問い合わせを追究する学習過程」が重要になる。前教材『いちばん大事なものは』では、「一番大事にしている生き方や考え方」について、対話を通して考えを広げる学習を行った。しかし十分に自分の考えをもつには至らない子も多かった。この時期の子どもたちは、進路や受験、卒業を控え、自分自身の生き方や考え方に関心を高めつつあった。

では、宮沢賢治の生き方や考え方が現代の人々に影響を与えていることを、ブックトークを通して紹介した。その中で、「何のために学びたいのか」と問うことで、「宮沢賢治の思いを受け取ること」「そのため、問い合わせを創出すること」、さらには「自身の生き方を見つめ直すこと」が結びつき、子どもたちの課題意識が醸成されていった。単元展開では、「宮沢賢治の思いを受け取る」という学習目的を明確にしながら問い合わせを追究することで、豊かな解釈を生み出す姿が見られた。単元終末では、「仲間と共に学んだ『やまなし』を通して、宮沢賢治のように、他者の思いに寄り添い、尊重できる大人になりたい」と語る子どもの姿も見られた。

『くじらぐも』の実践
川部 長人

運動会が終わり、「くじらぐも」の実践がスタートした。今回の單元では「おもいなかべながら読もう」というテーマで学習を進めている。子どもたちが『くじらぐも』の話を読んで、「いいな」や「すきだな」と思ったところをたくさん見つける学習を通して、お話の感想につながるような学習にしていきたいと思っている。今回の学習では、特に「音読」と「視写」の指導を中心に学習を進めたいと思う。今回の原稿では「視写」の指導を中心に書きたいと思っている。今回の原稿では「視写」の指導を中心に書きたいと思つていて、学生のころに低学年では「視写」の学習を大切にしたいと思っている。なぜ、視写の指導を大切にしたいと思つてているかというと、学生のころにさざなみにいるY先生の授業を参考したことがきっかけである。当時、A小学校の一年生を担任されていたが、「一年生でもこれだけ観したことがあるんだ」と子どもたちの姿に感激したからである。Y先生に授業後、国語の学習で何を大切にされているか質問したところ、「視写」の学習を大切にしているということを子どもたちの成果物を見せながら説明してもらつたことがある。そこから見よう見まねで、「視写」の学習に取り組んでいるが、私自身「視写」をすることによって、子どもたちが

書かれている文章にこだわって話ができるようになつてきたということが大きな手ごたえとしてあります。

『お手紙』の学習
井上 混斗

今回の『くじらぐも』の実践で、視写をする」とで「書かれている文章にこだわって話をする子どもの姿を紹介する。『くじらぐも』の話の中で、子どもたちが「天までとどけ、一、二、三。」と三回言う場面がある。発問として「天までとどけ、一、二、三」と三回出でてくるが、音読の仕方はどれも同じでいいかな?」と聞いてみた。すると、ほとんどの子どもたちが「一回目、二回目、三回目と声をだんだん大きくしていく。」といふ答えが返ってきた。「なぜ大きくなしていくの?」と聞いてみると、「一回目は三十センチ、二回目は五十センチ、三回目は空までどんどん書かれていくから、跳ぶ高さがどんどん高くなつていくから、それに合わせて、音読するときの声も大きくする。」という意見が出ってきた。他の子どもたちもその意見に賛成で、「天までとどけ、一、二、三。」のところを工夫して音読することにつながった。

視写の学習を通して、他にも子どもたちにとってよい効果がたくさんある。視写の学習を大切にしているといふことを子どもたちの成果物を見せながら説明してもらつたことがある。そこから見よう見まねで、「視写」の学習に取り組んでいるが、私自身「視写」をすることによって、子どもたちが成長が楽しみである。

(湖南市立菩提寺小学校)

『お手紙』の学習
井上 混斗

運動会での大きな達成感を胸に、心身ともに一段と成長した二年生の子どもたちと、最近国語科「お手紙」の学習に取り組んだ。この単元では、子どもたちは挿絵と音読で「がまくん」と「かえるくん」の気持ちを想像することから始めた。その後、本文の叙述から心情を表す言葉を探すことで、登場人物の気持ちをより深く読み解いた。この学習活動の中で見られた、子どもたちの学びが深まつた様子を紹介したい。

手紙を書いたかえるくんがまくんの家に戻り、手紙を待つように声をかける場面。ここでは「かたつむりくんは、まだやつて来ません。」という叙述が三度繰り返される。

子どもたちはこの繰り返しの叙述から、かえるくんの「まだかな：」という焦りの気持ちや、「早く手紙を読んでほしい」「この手紙をもらつたがまくんを幸せな気持ちにしたい」という、かえるくんの強い願いを想像していまし

がない」という叙述に注目し、「がまくんに喜んでほしい」「がまくんを幸せな気持ちにしたい」と、がまくんを思いやる気持ちを理由と共に捉えていました。

しかし、Yさんだけは異なる視

点から考察を深めました。Yさんは、手紙の最後の場面「ぼくは、こう書いたんだ。『親愛なるがまく』の気持ちを想像すること

がえるくん。ぼくは、ぼくの親友であることをうれしく思つていま

す。きみの親友、かえる』の叙述に着目しました。Yさんの意見は以下の通りです。

「がまくんによるこんでほしい気持ちもあるけど、窓のときみたいに、(かえるくんの書いたお手紙には)『親』っていう漢字が三回も出てきてる。『親』って漢字には、『とても』みたいな意味がある(実際に『親しい』から、ただの友だちじゃなくて、『とても大好きな友だちだよ』って気持ちも込めていると思う。」

Yさんは、繰り返しの表現と、以前の漢字学習で獲得した知識(「親」の多義性や用法)から、かえるくんががまくんを思う「友情の深さ」も考えており、私も含め、他の子どもたちもその読み深さに驚かされた。

この日の学習は、どの子も学びが広がり、そして深まり「しあわせな気持ち」だったようと思う。

その次の時間、「かえるくんががまくんへのお手紙に込めた思いについて、再び叙述をもとに考えさせた。ほとんどの子どもは、「がまくんへお手紙をもらつたこと

(豊郷町立日栄小学校)

音読発表会を通して

山田
定子

「サラダでげんき」は、一年生の子ども達にとつては長い文章ではあるが、主人公のりつちゃんに、サラダ作りに協力する動物たちが次々と登場する楽しいお話をできる。そのため、どの子も、（次はどうなるかな）と興味を持つて読み進めることができた。

この学習をくり返していくと、次々に登場人物たちの行動や会話などを、人物の特徴と関連づけて読みとることができた。また、音読も、場面が進むにつれて、大きな声ではつきりと、工夫しながら読むようになってきた。

また、他の動物だったら、何を教えてあげるかを考えて手紙を書き、友だちと交流した。いろいろな話が出てきて、どの子も興味を持つてどんどん書き進めることができました。

音読発表会では、グループで、どこの場面を読むかを決め、さらに自分の書いた手紙もあわせて発表した。よく練習した成果が出て、どの子も自信を持つて発表することができた。校長先生にも聞いていただき、おほめの言葉をいただき、子どもたちはとてもうれ

【りつちゃんへの手紙の例】
◎りつちゃんへ
サラダには、たまごを入
ハダナよ。二玉が大きくなり

「友だちといつしょに音読をして、自分の考えたお話も発表しよう。」
ということで、音読発表会をすることになった。
毎時間の読みの学習は、次のように進めた。
①全文音読をする。
②本時の場面を視写し、音読する。

(④登場人物の様子や会話を読みとる。(言葉をつけ加えたり、言いかえたりする。)

(⑤音読する。(どのように読めばいいか考えながら読む。)

(⑥りつちやんに一言手紙を書く。

(⑦学習のまとめをする。(ノート

(東近江市立湖東第一小学校)

かえるくんと
がまくんシリーズの
おすすめカード

二年生「お手紙」（光村図書二年下）を扱った学習。児童の初発の感想には、このお話を素直に楽しんで読んでいるなと思わせるものが多かった。単元の後半、その初発の感想にある「おもしろい」「かわいい」「やさしい」「友だち思い」といった感想の言葉を取り上げて授業を進めめた。「感想に『おもしろい』と書いた人が多かつたけれど、どんなところがおもしろかったのですか。」と聞くと、かたつむりくんが、「すぐやるぜ、がまくんがお屋ねをしていたところ」と言つてゐるのに、四日もかかるといふところ。かえるくんがもどつてきたときに、「がまくんがお屋ねをしていたところ」といつたように、そういうえは読み語りをした時にも笑い声が聞こえられた。その中で、『おもしろくて好き』以外に、『おもしろくてすき』『かわいくておもしろい』『なんでも、と思つておもしろい』といつた感想の言葉があつたことも私から紹介した。児童の発言に、「さし絵のベッドも、かえるの形をしてかわいい」といつたようには挿絵のものも、おもしろさについてたくさんのおもいを出し合つことができた。

てているところが、友だちつていい
なと思つておすすめです。」
なるほど、その場面は、このお話
のクライマックス場面であり、大
人でもジーンとくる場面である。
「素敵なお話の素敵な場面を選ん
だね。先生もそう思つたよ。」と
褒めた。他の児童も、「私は、ク
リスマスイフが好き。だつてー。」
と、休み時間になつても教えに来
くれるのが嬉しい。

いつもは文を書くとなると頭を抱えて投げ出そうとすることも多い太田さん（仮名）は、シリーズの最終話「ひとりきり」を選んで、書いた。頭をひねつて次のように

終に書くようにした。シリーズの
お話しは、朝や授業の時間に一話ずつ
読み語りを聞き、おすすめポイントをメモするようにしていっていいっ
た。シリーズの中、一番のおすすめの
お話を選び、そのお話を書くとい
て、「おすすめカード」を書くと
いう流れ。読み語りの際、挿絵は
大型モニターに映した。

かえるくんがいつしょによろこんでいるところ。「等と、これもたくさん出された。このような、「おもしろいところ」「やさしいと思ったところ」等、「〇〇なところ」を「おすすめポイント」として、「かえるくん」とがまくん」のシリーズについで、「おすすめカード」を単元の最

かえるくんが、いそいでまく
んに手紙を書こうとしたところ。
かえるくんが、何度も窓の外を
見ているところ。
かえるくんが、がまくんにお手
紙が来るよとはげましているところ。

「読む」と「書く」

複合単元の授業づくり

この秋、「書くこと」の授業づくりを校内研究で取り組まれている複数の学校で、二年、三年、四年の研究授業を参観し、協議会に参加する機会があつた。単元名・教材名は次の通り。

- ▽二年「説明の仕方に気をつけて読み、それをいかして書こう」「紙コップ花火の作り方」「おもちゃの作り方を説明しよう」
- ▽三年「例の書かれ方に気をつけて読み、それをいかして書こう」「すがたをかえる大豆」「食べ物のひみつを教えます」
- ▽四年「中心となる語や文を見つけて要約し調べたことを書こう」「未来につなぐ工芸品」「工芸品の魅力を伝えよう」

それぞれの授業づくりにおける指導の工夫や学習の様子について紹介したい。

二年生の学習では、実際に本教材の紙コップ花火を作ることで、体験を通しての筆者の工夫に気づいたり考えたりできるようになされ

二学期の国語科の学習。光村岡書の教科書には、説明的文章を読み、構成や表現の工夫をとらえ、学んだことを生かして説明的文章を書く学習を展開する複合単元が設定されている。

三年生の学習では、「すがたをかえる大豆」で学んだ説明の工夫を生かして、分かりやすい例の順序を考えることに取り組まれていた。読みの学習でまとめた「わかりやすく書くためのポイント」を掲示し、(すがたをかえる)食品について、二年生に分かりやすく説明する文章を書く活動を計画されていた。

巻き物風の「食べ物の秘伝書」を見本として用意され、子どもたちの意欲を喚起させていた。図書資料で調べたことを「秘伝書」にまとめるために、どのような工夫があつて何ができるのかを一枚の情報カードに一つの食品安全について書き、書きためた情報

活動を取り入れ、互いに文書を読み合ふ機会を設けるようにされた。

た。順序を表す言葉（まず・つぎ
に・それから等）や数・長さ・大きさ・太さ・位置等を具体的で分かりやすい説明の言葉で表現することに着目する読みの学習が展開された。

学んだことを掲示したりワークシートを用意したりして、一年生に分かりやすいおもちゃの作り方を説明する文章の組み立てと順序を考える本時の学習に役立てようとしていた。そして、グループ活動を取り入れ、互いに文章を読

複合単元の授業づくりを構想する場合、単に二つの学習をつなげて行うだけではなく、それぞれの指導のねらいを一層効果的に実現できるよう工夫することが求められる。そのためには、子どもが「読むこと」と「書くこと」を自らつなぐ学びの姿を引き出したい。

た。子どもたちがリーフレットの仕上がりをイメージできるよう、指導者は見本を準備され示されてい
動が大事なポイントとなる。伝えたい魅力をリーフレットの紙面に効果的に記述するためには、「読むこと」で学んだ要約の技能が必要になる。

もつた工芸品について、リーフレットづくりを通して、伝えたい情報を探し、分かりやすく伝えるための表現方法を工夫することを目指されている。

カードを使って、分類、選択、並べ替えを行えるように配慮されていた。

▼そこで、学習の積み上げと課題を踏まえ、「ちいちゃんの气持ちり」では、「ちいちゃんの気持ちになつて読み、話し合いながら物語を読んでいく」という授業が構想されている。▼視点は以下の二つ。
ア 単元を通した「問い合わせ」（「ちいちゃんのねがいは何？」）（「ちいちゃんからうばつたものは何？」）の設定
文 章 検討による、共有と新たな学び合いを子供達自身で作り出せる授業展開の工夫。▼児童の実態を把握分析して単元の指導目標と評価基準を設定し、具体的な学習活動・学習形態・学習評価（教師による児童自身の振り返り）を構想することは授業の基本中の基本。また、単元を渡つて成果と課題を踏まえた見通しのある実践の歩みの大切さも改めて確認。
▼巻頭には、伴野彰宣様からの玉稿をいただきました。深謝。

▼十月例会（第五二三回）の提案者は畠中翔太さん（大津市立田上小学校）。提案を読むと、物語を読むことの学習では、「気持ち・行動・情景」を表す言葉を大切にすることをテーマにして実践を進めていくきている。三年生の二つの物語の学習の歩みを振り返ると、「気持ちや行動に加えて、そこから考えた性格や情景をとらえて発表できる子供は増えてきた。この積み上げを活かしていきたい反面、中にはまだそれらを探すことなどが難しい子もいる」（提案文よりの引用）との実態が記述されている。

編集後記

▼十月例会
(第五二三回)

様からの玉
深謝。
(森邦博)